

第16回「地域の伝承文化に学ぶ」コンテスト 総評

國學院大學 文学部 教授 小川 直之

第16回「地域の伝承文化に学ぶ」コンテスト総評

新型コロナウイルス感染拡大のなかで

平成17年度(2005)から開始した「地域の伝承文化に学ぶ」コンテストは、令和2年度(2020)で第16回目を迎えました。初年度の応募作品数は133件で、その後、このコンテストが次第に知られるようになり、昨年度の第15回は609件でした。しかし、今年度は年始めの1月下旬から新型コロナウイルスの感染が世界中に広まり始め、3月には国内のすべての小中高校に休校措置をとることが要請され、4月7日には政府から新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言が発せられ、1回の期間延期を含めて5月25日まで緊急事態が続きました。新型コロナウイルスへの感染はこれで終息したわけではなく、大学も含めて各学校では感染防止のための措置がとられ、生徒・教員とも例年とは異なる特別な対策の中での学習で、さまざまな戸惑いや不安があったと思います。

第16回「地域の伝承文化に学ぶ」コンテストは、こうした状況下においても例年通りの実施を決め、応募期間を7月1日(水)から9月10日(木)(必着)と決めました。対象が地域の伝承文化であり、その研究法は実地調査を重視するので、応募作品の制作には何らかの制限が予測されましたが、地域での「学び」とコンテストを中断した場合には、その再開は困難になるという判断でした。応募作品数の減少は当初から予測されましたが、合計で266件の応募があり、新たに応募してくれる高等学校もありました。

審査基準と研究の手順

1、審査基準

今までの総評のなかでも明記してきたように応募作品の審査は2段階で行っています。第1段審査は、次に記す4つの基準のうち①と③を重視し、「地域の伝承文化」を扱っていない作品、Web上にある諸情報や書籍の記述を引用し、これが作品内容の大半を占めている作品はこの段階で落選としています。第2段審査は各部門とも複数人(2名)で審査して佳作以上の授賞作品を選んでいきます。第2段審査の基準も下記の4点です。

審査基準は次の通りです。

①応募作品の内容が「地域の伝承文化」であること

「地域の伝承文化に学ぶ」ことが主題であるので、第一に重要なことは「地域の伝承文化」を対象としているかどうかです。コンテストの要項では「各地域に伝わる昔話・伝説や祭り・

伝統行事・郷土料理・方言などの文化の調査研究」として例示している通りで、学問分野でいうなら民俗学や口承文芸学を中心とする分野です。

各地で人々の生活の中で継承、伝承されてきた文化が対象となり、郷土史や産業史とか、観光名所を扱った内容ではありません。応募作品には、今回も含め毎回「伝承文化」とは言いえない事象を扱ったものがあります。

②自らの視点で課題が立ち上がっているか

これは応募する人の独自の視点、問題関心であることを重視するということです。何を課題とするかを決めるのは容易ではないかもしれませんが、この後に記す研究の手順を参考にしてください。

③対象の現地・現物に自ら足を運んで接しているか

先に述べたようにインターネットの Web 上にある情報、あるいは書籍からの情報だけで制作されている作品は、応募者のオリジナルなものとはいえません。参考にした Web の URL や文献名をきちんとあげている作品も多いのですが、パソコン上や書籍上の情報・意見は自分自身が調べたこととはいえません。Web 情報は便利なことはよくわかりますが、自分自身が実地に調べたことでなく、こうした情報だけでは、Web 情報の誤りにも気づくことはできません。

この基準を満たしていない限り、佳作以上の評価は得られません。

④課題に基づいた調査内容と結論が合致しているか

自分で調べたことをどのようにまとめるかということで、まとめの道筋に矛盾はないか、結論が調査結果に基づいているかということです。

まとめる際には何を問題とし、調査結果の要点は何なのか、わかりやすく工夫することが大切です。文章だけで一本調子で書き綴ったのでは、自分が疑問に思ったことや調査・研究の結果何がわかったのか、読む人に伝わりにくいといえます。

2、研究の手順

第 15 回「地域の伝承文化に学ぶ」コンテストの総評でも書いたことですが、上記の審査基準と併せて再度、研究の手順を記しておきます。ここで書くことは、大学生になって自ら学び、研究する手順でもあります。

①課題を決める

課題が決まらなければ何もできませんので、まずは自分の体験や身の回りにあることの中から伝承文化と思われ、興味関心をもったことを列記することから始めましょう。1 枚の紙に 1 テーマずつを書き、このことについて図書館の郷土資料コーナーにある図書で調べ、

概略を書き加えます。Web 上で検索して情報を集めることもできますが、Web 情報を活用するのはこの段階だけで、作品(レポート)づくりのための本調査は、自らが現場に行き、自分で情報を集めることが必要です。こうしていくつかの課題候補ができれば、その中から 1 つを選びます。

②課題が決まったら下調べをする

図書館の郷土コーナーにある図書やネット上で調べたことは、課題の下調べにつながります。テーマ選択のために調べたことがらを、さらにもう一歩進めて調べるのが下調べです。

③課題への取り組み手順を考える

課題の下調べではさまざまな情報収集が必要です。それは、課題について今までどのような研究が行われているのか、どのように説明されているのかを調べることから始め、これをもとに自分は、あるいは自分たちは何を、どのように調べるのかを決めなくてはなりません。調査計画を立てるということです。このことは、一方では研究のまとめ方にもつながっています。まとめの方法を考え、レポートの仮目次を立てておく効果的です。

④現地で調査を行う

何度も書きますが、このコンテストでもっとも大切なことは、課題について図書を丸写しにしたり、Web 上の情報をコピー＆ペーストしたりすることです。このことは著作権の侵害にもなりかねませんし、こうしてレポートをつくっても何も身につきません。

もっとも重要なことは、課題の現場に行って自ら情報収集を行い、これをもとに伝承文化を考え、意見をまとめているかどうかです。このことが「歩く・見る・聞く・考える・まとめる」の重要点といえます。何ごとも自分の目や耳、心、さらには感触などによって、等身大に捉えていくことが大切です。

調査方法は課題の内容によって異なります。祭りや芸能を見学し、写真に撮るとか、当事者にインタビューするとか、地図などの図を作成するとか、いろいろな方法があります。どのような方法をとるのかは、③であげた段階でおおよそ決めておき、現場での調査の際に必要なに応じて修正すればいいのです。

⑤調査結果からレポートの目次をたてる

調べた情報をもとに、改めて何をどのようにまとめるのか検討をします。レポートで「何を言いたいのか」を明確にすることが大事です。あれもこれもではなく、課題について深掘りし、このことがレポートを読む者に伝わるようにすることです。

⑥レポートの原稿を書く

目次を立てたときに決めた「何を言いたいのか」が分かるように、原稿を作成します。重

要なことは根拠をもった意見ということです。なぜ、そう考えられるのか、そう言えるのか、第三者が納得できなければなりません。そして、肝要なのはわかりやすいかどうかです。レポートを別の人に読んでもらって意見を聞いて修正して仕上げるのも効果的です。

最優秀賞に選ばれた作品はどこが優れているのか

このコンテストの作品評価、賞の選定は相対評価ではなく、絶対評価で行っています。例年の授賞作品の質に比して授賞に値するかということで、応募作品全体の出来具合を相対的にみて評価するものではありません。これはコンテストとしての質を保つためです。

今年度は残念ながら、地域文化研究部門団体では、優秀賞は 2 作品えらびましたが最優秀賞に達しているものはありませんでした。地域民話研究部門個人では、佳作が 1 点だけで優秀賞、最優秀賞ともこれに値する作品はありませんでした。いずれも先にあげた審査基準に基づいての評価です。

学校活動部門というのは、生徒たちがある課題に取り組み、一定の成果をあげることで、生徒たちの学びのあり方がどのように変わったのかを教員が指導して応募することを期待していますが、なかなかこれに合致した作品は出てきません。生徒たちの取組と成果が、生徒たちの学びのあり方に何らかの好影響を与えていると思われる作品を 3 点選びました。

以下では最優秀賞に選定した 2 作品について、優れた点を上げておきます。わかりやすくするため箇条書きにします。

1、地域民話研究部門団体・最優秀賞

「民話の伝承と古代下野国における交通網の関係―地域の民話から史実を探る―」

栃木県立矢板東高校 リベラルアーツ同好会

- ①内容は、高校が所在する地にゆかりの「那須与一の伝説」を中心とする内容で、「地域の伝承文化に学ぶ」「地域民話研究部門」の内容と合致する。
- ②那須与一の物語は『平家物語』『源平盛衰記』などにもあるが、全国各地に伝承されている与一伝説を、与一の在地である大田原市を除いて 41 例を収集している。
- ③さらに栃木県北部の関連伝説は、実地に調査を行い、伝承を確認している。
- ④那須与一伝説に加え、九尾の狐伝承も取り上げ、両者にどのような関係があるのか検証している。
- ⑤両者の関係は、与一の先祖である那須貞信の伝承によって形成されていることを発見している。
- ⑥さらに以上の伝説を歴史事象と対比し、検討を加えている。

全国各地に残る那須与一の伝承 ※与一の地元である大田原市に残る伝承は除く		
1	南部切田神楽	青森県十和田市
2	小迫祭り	宮城県栗原市
3	与一供養塔	山形県米沢市
4	海老山地区	福島県会津美里町
5	観音寺	栃木県矢板市
6	那須大八郎と	栃木県鹿沼市

那須与一伝説の一覧表(以下 41 まで続く)

右: 那須与一関連伝説地の実地調査

①鴻巣馬頭観音堂（民話と関連するワード：那須与一、馬）

集会所の近くにあり、近くにいた人によると、奉納されている馬は以前堂裏にあったが、現在は堂内にあるそうで実物を目で見ることができなかった。また、与一の資料にある観音堂の写真とは背景が大きく異なっていた。この馬頭観音は那須与一の愛馬「鶴黒の駒」の霊を弔うものといえられている。



②光厳寺（民話と関連するワード：那須与一）

マップ上では東に位置し、また寺の敷地も高低差がある。写真の銘鐘は目立つ所にあったが、お墓等は林の中にあった。お墓の位置は階段を登ったところであり、下からは見えにくく、お寺の方に教えて頂いた。この寺是那須与一が草創したと伝わっている。



③高館跡（民話と関連するワード：那須与一）

以前は山城があったというのが納得出来るくらい山の上にあり、そこまでの道のりもかなり険しく勾配も急であった。今は展望台が設置されていて、見晴らしも良くここに城があったとされる理由も理解できる。この高館は、一時那須氏の本拠となり、那須与一も在城したと伝えられる。



2、地域文化研究部門個人・最優秀賞 折口信夫賞

「屋久島民謡『まつばんだ』を後世に伝える方法」

鹿児島県立屋久島高校 寺田 雅

- ①内容は屋久島に伝わる民謡「まつばんだ」を後世に伝える方法を考え、実践しようというもので、地元の伝承文化を対象としている。
- ②従来の研究からこの民謡が与那国から伝わったことなどを明らかにした上で、高校生 280 人を含む島民 439 人にこの民謡についてのアンケート調査を実施し、認知度や伝承に関する意見をまとめている。
- ③伝承されている民謡が現在、島民にどのように評価されているかを明らかにした上で、自ら中間発表会を開催している。
- ④その内容は民謡を採譜し、屋久島高校吹奏楽部の協力でサックス四重奏で演奏して町内放送で公開している。
- ⑤さらにこれらの結果を踏まえて、屋久島町へ民謡継承の方法を提案している。民謡研究だけでなく、採譜に基づいた編曲なども行い、より現代化による継承も試みるなど実践的である。

4 目的

本研究では、以下のことを目的とする。

- (1) 現在の屋久島町民の『まつばんだ』の認知度、民謡の普及活動を調べる。
- (2) 『まつばんだ』を屋久島町民の身近に感じさせるための方法を調べる。

5 方法

(1) インタビュー調査

令和元年12月4日に「まつばんだ受け継ぎ隊」と呼ばれる『まつばんだ』を島の宝として伝承するグループの方々に、インタビュー調査と取材をさせていただいた。(図2、3)



図2 歌い練習の様子



図3 インタビューの様子

(2) 屋久島の民謡におけるアンケート調査

【実施期間】Ⅰ：R2年2月上旬～中旬 Ⅱ：R2年5月下旬～6月上旬

【対象者】Ⅰ：R1年度 屋久島高校 1・2・3年生／職員

Ⅱ：R2年度 屋久島高校 新1年生／1・2・3年生保護者

上記期日に屋久島の民謡についてのアンケート調査を屋久島に住む屋久島高校生、職員、保護者439人を対象に実施した。(資料1)

6 結果と考察

(1) インタビュー調査結果

まず『まつばんだ』の音楽的な面から紹介していく。結論から言うと、『まつばんだ』は琉球音階と言われる音階からできている。琉球音階というのは、名前のとおり奄美・沖縄地方の民謡などに使われている特異的な音階である。

一般的な音階はハ長調、いわゆる「ドレミファソラシド」(図4：譜例1)という音階からなるが、琉球音階は「ドミファソシド」(図5：譜例2)という、一般的な音階の「レ」と「ラ」が無い音階で作られている。ただし、「ドミファソシ」の5音だけを使って曲が作られている訳では無く、「レ」や「ラ」の音が使われている場合

そのあと収録した音源を編集し、さらに聞きやすくなるように録音の際に入ってしまったノイズや雑音を取り除き、テンポを20%アップして音源を完成することができた。作成した楽譜は図14である。

編曲 寺田 雅

Alto saxophone

Tenor saxophone

Baritone saxophone

①

A. sax

T. sax

B. sax

②

A. sax

T. sax

B. sax

③

図14 屋久島民謡『まつばんだ』町内放送バージョン

町内放送した編曲譜面

実地調査の様子

以上で総評を終えますが、ここで記した審査基準、研究の手順、さらには最優秀賞の作品概要を参考にして、第17回コンテストではより優れた作品が多く応募されることをお待ちしております。